

【教育ノート】

介護福祉士養成教育における 対人援助スキル習得に関する研究

家高 将明^{*}, 三田村 知子^{**}, 清水 香織^{**}, 宗清 芳美^{***}

A Study on Acquisition of Human Service Skills in Care Worker Training

Masaaki Ietaka, Tomoko Mitamura, Kaori Simizu and Yoshimi Munekiyo

要 旨

介護福祉士は、身体的な介護技術の習得だけでなく、利用者と良質な関係を形成し、彼らの生きる意欲を醸成するための対人援助スキルを習得することが求められる。しかし介護福祉士養成教育に関する研究の中で、対人援助スキルは研究対象として着目されることはほとんどなかった。そこで本研究は、これまであまり着目されてこなかった対人援助スキルに焦点を当て、抽象的である対人援助スキルの構造を示すとともに、対人援助スキルを習得するにあたっての介護福祉士養成教育における有効性及び課題について検討することを目的とした。そして本研究は大阪府下における2年制の介護福祉士養成施設6校の学生346名を対象に、質問紙を用いて横断的方法による郵送調査を実施した。その結果、①学生の対人援助スキルの一部が、「相手の立場に立った関係形成スキル」及び「専門職としての責務遂行スキル」で構成される可能性があること、②介護福祉士養成施設における教育効果によって学生における対人援助スキルが高まったと推察できること、③男性において「相手の立場に立った関係形成スキル」に対する十分な教育効果が得られなかった可能性があること、④社会人経験のある学生の「相手の立場に立った関係形成スキル」は現在の介護福祉士養成施設における教育プログラムでは十分な効果が得られない可能性があること、⑤教員が学生と関わることによって「専門職としての責務遂行スキル」が高まる可能性があることが示された。

Abstract

The purpose of this study is to show the structure of human service skills, and to examine the effectiveness and problems relating to care worker training. In this study, a mail survey was administered to 346 students at a care worker training school in Osaka Prefecture. The results showed the following: 1) A part of the human service skills of students may be comprised of two skills – “the skill of building relationships while adopting the perspective of the other person” and “the skill of duty accomplishment as

受付日 2011.9.12 / 受理日 2011.10.26

* 関西医療技術専門学校 教員 / ** 関西女子短期大学 医療秘書学科 助教 / *** 関西女子短期大学 医療秘書学科 教授

a professional." 2) The human service skills of students may have been enhanced due to the educational effects of the care worker training school. 3) Education on "the skill of building relationships while adopting the perspective of the other person" may not have been sufficiently effective for male students. 4) The current educational program may not be adequate for imparting "the skill of building relationships while adopting the perspective of the other person" to students who have experience as working adults. 5) Involvement of students with teaching staff may boost "the skill of duty accomplishment as a professional."

● ● ○ **Key words** 対人援助スキル the human service skills / 介護福祉士養成教育 care worker training / 教育の有効性と課題 the effectiveness and problem of education

はじめに

近年、高齢化が進展する中で介護福祉士養成施設において、質の高い介護福祉士を輩出することが期待されている。介護福祉士については、入浴・排泄・食事等の身体的な介護を行う単純労働を担う職種として位置づける見方もあるが、ここで期待される人材は、こうした単純労働にとどまるものではない。そして介護福祉士が担う労働については、山口が「業務行動の面からみればいかにも単純な労働作業としてそのたいへんさも理解されやすいが、その本質はむしろ、対象の人的、精神的価値へのかかわりにある」¹⁾と指摘していることや、黒川がその専門性について「排泄の介助という単純労働であってもそれをクライアントの『成長』に役立てるように創意工夫する過程の中に」ある²⁾と指摘していることからわかるように、その本質は利用者の内面に目を向け、彼らの成長を支えることにある。

また奈倉が利用者の成長を支えるためには、自分らしく生きたいという意欲を利用者の中に醸成する必要があり、それを醸成するためには入浴・排泄・食事といった日常的な生理的欲求を充足するだけでなく、支援者と利用者との間に支援関係を形成することが必要になると指摘していることから³⁾、期待される質の高い介護福祉士を養成するためには、身体的な介護技術だけでなく、利用者との良好な関係を形成し、彼らの生きる意欲を醸成するための対人援助スキルを習得させることが求められていると言えよう。

そして介護福祉士養成教育の現状についてみると、2009（平成21）年度にカリキュラム改正が行われており、新たな科目として「人間関係とコミュニケーション」

」(30時間)や「コミュニケーション技術」(60時間)が設けられ、旧カリキュラムと比して、利用者との良好な関係を形成し、彼らの生きる意欲を醸成する対人援助スキルを習得するための教育に力点が置かれるようになってきている。

しかしこれらの対人援助スキルは、もう一方の介護福祉士に求められるスキルである介護技術と比べ、外部からみえにくいスキル⁴⁾であり、その内容も多岐に渡ることから、介護福祉士養成教育に関する研究対象として着目されることはほとんどなかった。

よって本研究は、これまで介護福祉士養成教育の中で研究対象としてあまり着目されてこなかった対人援助スキルに焦点を当て、抽象的である対人援助スキルの構造を示すとともに、対人援助スキルを習得するにあたっての介護福祉士養成教育における有効性及び課題について検討することを目的とする。

I 方法

1) 対象

本研究は、縁故法により抽出した大阪府下における2年制の介護福祉士養成施設6校の学生346名(回収率:84.4%)を対象に実施した。本研究が対象とした介護福祉士養成施設は、短期大学2施設、専門学校4施設である。また近年、離転職者等の就職を促進するための公共職業訓練が介護福祉士養成施設において行われており、本研究対象者にはこれらの職業訓練生も含まれている。本研究における対象者は男性35.8%、女性64.2%であり、平均年齢は25.3±9.8歳であった。その他の調査対象者の基本属性は表1に示す。調査方法

は養成施設単位による郵送調査法によって実施し、各養成施設におけるゼミナール等の時間を利用して、調査対象者の直筆によって回答を得た。

倫理的配慮は、事前に各養成施設の担当教員に本研究の目的、意義、方法、個人情報 の徹底管理の約束、データを研究目的以外で使用しない旨を口頭及び書面にて説明し、同意を得た。さらに調査対象者に対しては、各養成施設の担当教員から口頭にて上記の説明を行い、同意を得た上で実施した。調査期間は、2011年1月15日～2月5日に行った。

2) 測度

本研究は、性別、学年、年齢、社会人経験の有無、実習及び講義の有効性、他者交流の頻度、対人援助スキルの程度を測定するための項目を設けた。

実習及び講義の有効性を測定する項目は、対人援助スキルを身に着けるにあたっての各養成施設で実施されている実習及び講義の有効性についてみるために設定した。そして各養成施設における実習及び講義の内容は、共通する基本的枠組みをもちながらも、養成施設ごとで様々に行われているため、この設問で示す実習及び講義の具体的内容は指定せずに、それぞれについて“役立った(4点)”、“多少役立った(3点)”、“あまり役立たなかった(2点)”、“役立たなかった(1点)”の4件法により回答を求めた。

また他者交流の頻度を測定する項目は、対人援助スキルが実習及び講義による学習だけでなく、他者との交流を通して習得されることから、学生が日常的に交流していると思われる教員、保護者、友人との交流についてみた。交流内容については、交流の中で何らかの対人援助スキルが活用されると考えられる相談場面を取り上げ、授業や実習に関する相談と授業や実習以外に関する相談に分け上で、他者に相談を持ちかける頻度について“常にしている(4点)”、“時々している(3点)”、“たまにしている(2点)”、“全くしていない(1点)”の4件法により尋ねた。教員、保護者、友人における各交流頻度は、2つの相談場面の頻度を合算して算出した。

学生における対人援助スキルを測定するための項目は、ホームヘルパーの実践から21項目からなる対人援助スキルを抽出した西川の先行研究を参考に設定した⁵⁾。この西川が抽出した対人援助スキルは、自分や

利用者の感情及び立場をよく理解してサービスを提供することができる「理解対応スキル」、利用者 に説明し、考えを伝え、目標に向かってやる気を引き出す「自立協働スキル」、マイナスの感情を抑制し、適切な感情を維持する「感情管理スキル」、初対面で利用者 と良い関係を築き、ニーズを把握する「洞察スキル」からなる。これらのスキルは、ホームヘルパーの実践に限定されたものであるが、実践現場から抽出されたスキルであることから、学生においても習得することが求められるスキルとして位置づけることができる。しかし実践現場の中で展開されているスキルをまだまだ未熟な学生にそのまま習得すべき基準として当てはめることには無理があると思われるため、本研究は西川の対人援助スキルの項目を、学生が講義や実習を通して習得することができるものになるよう若干の修正を加えた(表2)。そして修正を加えた21項目は、共同研究者以外に社会福祉学を専門とする研究者1名、介護福祉学を専門とする研究者1名、介護現場の現任者2名のレビューを受けた。また本研究において設定した対人援助スキルを測定するための尺度は、“できた(4点)”、“どちらかといえばできた(3点)”、“どちらかといえばできなかった(2点)”、“できなかった(1点)”の4件法により回答を求めた⁶⁾。

3) 分析の方法

本研究は、学生における対人援助スキルの構成要素を抽出するために探索的因子分析(主因子法 プロマックス回転)を行った。また抽出された因子の学年ごとによる得点差をみるために、t検定を用いて検討した。さらに本研究は、対人援助スキルにおける学年の影響をより詳細に検討するために性別及び社会人経験の有無等の変数を加え、分析を行った。またこの他に、抽出された因子と他者(教員、保護者、友人)との関わり の関連をみるために Pearson の相関係数を算出した。

II 結果

1) 因子分析による学生における対人援助スキルの構造分析

学生における対人援助スキルの構成要素を抽出するために探索的因子分析(主因子法 プロマックス回

転)を行った。分析に際しては、初期の固有値が1.00以上であること、各因子を構成する各項目の因子負荷量が0.40以上になること、解釈可能な因子を構成することを因子抽出の条件とした。以上の条件に基づき、繰り返し分析を行ったところ、最終的に2因子で構成することが最も解釈し易かった。因子分析の結果を表3に示す。因子間の相関は、第1因子と第2因子の間に0.29の相関が認められた。

そして第1因子は、「初対面でも利用者と打ち解けて話す」、「自分の口調や態度が利用者にとどのように見られているか意識する」、「自分に関心がないことでも関心をもつよう努める」の項目から構成しており、利用者の立場に立って関わろうとする態度を示す項目群として位置づけることができることから「相手の立場に立った関係形成スキル」と命名した。また第2因子は、「目先のことにとらわれず辛抱強く我慢する」、「利用者が求めている要望は何か把握する」、「利用者との間に対立や問題が起こっても責任をもって対処する」の項目から構成されており、専門職としての姿勢や責任

感を示す項目群として位置づけることができることから「専門職としての責務遂行スキル」と命名した。

また内的整合性を検討するために、質問項目全体と因子別にCronbachの α 係数を算出した。その結果、全体の α 係数0.75、第1因子0.72、第2因子0.78であり、尺度の信頼性が確認された。

表1 調査対象者の基本属性

学年別人数割合	1年	59.3%
	2年	40.7%
性別	男性	35.8%
	女性	64.2%
年齢	全体	25.3 ± 9.8 歳
	1年生	24.8 ± 9.3 歳
	2年生	26.0 ± 10.4 歳
社会人経験のある	全体	34.4%
学生の割合	1年生	34.9%
	2年生	33.6%

表2 対人援助スキル尺度の記述統計量

	M ± SD
Q1:利用者が前向きな気持ちになれるよう励ます	2.80 ± 0.65
Q2:利用者の精神的・身体的苦痛から目をそむけない	2.82 ± 0.68
Q3:利用者の社会・経済状況や人間関係を理解する	2.63 ± 0.70
Q4:利用者がどのように感じているかを理解し、利用者の視点で物事を考える	2.69 ± 0.65
Q5:それぞれの利用者のやり方に合わせてサービスを提供する	2.63 ± 0.73
Q6:どんな利用者とも良い関係を築く	2.81 ± 0.77
Q7:自分自身の長所や短所についてよく理解している	2.92 ± 0.73
Q8:さまざまな方策を用いて、利用者の問題解決のための提案をする	2.20 ± 0.68
Q9:自分が取ろうとする(取った)行動について、なぜそのような行動を取る(取った)のか説明する	2.61 ± 0.81
Q10:利用者が主体的に行動できるように適切な言葉かけができる	2.64 ± 0.69
Q11:利用者との間に対立や問題が起こっても責任をもって対処する	2.22 ± 0.73
Q12:自分が感じたことを利用者にメッセージとして素直に伝える	2.79 ± 0.78
Q13:逆境やストレスが多い状況でもやる気を失わない	2.76 ± 0.84
Q14:目先のことにとらわれず辛抱強く我慢する	2.91 ± 0.75
Q15:落ち込んでもうまく立ち直る	2.87 ± 0.83
Q16:どんなにいらいらしても、利用者を前にするとそれを切り替える	3.25 ± 0.67
Q17:利用者が求めている要望は何か把握する	2.50 ± 0.65
Q18:利用者の口調や表情、振る舞いから利用者の感情や思いを理解する	2.78 ± 0.64
Q19:初対面でも利用者と打ち解けて話す	2.82 ± 0.81
Q20:自分の口調や態度が利用者にとどのように見られているか意識する	2.84 ± 0.73
Q21:自分に関心がないことでも関心をもつよう努める	2.94 ± 0.71

※下線を示した設問は、西川における対人援助スキルの設問を修正したものを指す。

表3 対人援助スキル尺度に対する因子分析の結果

項目	I	II	共通性
第1因子：相手の立場に立った関係形成スキル ($\alpha=.72$)			
Q19:初対面でも利用者と打ち解けて話す	0.80	0.01	0.64
Q20:自分の口調や態度が利用者にとどのように見られているか意識する	0.77	0.03	0.57
Q21:自分に関心がないことでも関心をもつよう努める	0.65	0.04	0.45
第2因子：専門職としての責務遂行スキル ($\alpha=.78$)			
Q14:目先のことにとらわれず辛抱強く我慢する	0.06	0.81	0.62
Q17:利用者が求めている要望は何か把握する	0.08	0.63	0.45
Q11:利用者との間に対立や問題が起こっても責任をもって対処する	0.02	0.61	0.38
固有値	2.68	1.36	
因子寄与率 (%)	36.89	14.79	

2) 対人援助スキルと基本属性等との関連分析

次に抽出された2つの対人援助スキルについて学年ごとの平均得点差をみた結果、1年生よりも2年生に「相手の立場に立った関係形成スキル ($p<0.01$)」及び「専門職としての責務遂行スキル ($p<0.01$)」ともに高い傾向がみられた(表4)。さらに性別ごとの学年における平均得点差をみると、女性においては「相手の立場に立った関係形成スキル ($p<0.01$)」及び「専門職としての責務遂行スキル ($p<0.01$)」ともに2年生に高い傾向がみられたが、男性においては「専門職としての責務遂行スキル ($p<0.01$)」のみに2年生に高い傾向がみられた(表5)。

また近年、介護福祉士養成施設は公共職業訓練の委託を受けるなど社会人経験を有する学生の数が一定程度を占めており、本研究対象者に占める社会人経験を有する学生の割合は34.4%であった。そこで次に社会人経験を有する学生の状況を捉えるために、社会人経験の有無ごとの学年における平均得点差をみた。その結果、社会人経験がない群においては「相手の立場に立った関係形成スキル ($p<0.01$)」及び「専門職としての責務遂行スキル ($p<0.01$)」ともに2年生に高い傾向がみられたが、社会人経験がある群においては「専門職としての責務遂行スキル ($p<0.01$)」のみに2年生に高い傾向がみられた(表6)。

次に対人援助スキルは他者との交流の中で獲得されることが考えられるため、対人援助スキルと他者交流頻度との相関をみた。その結果、授業内外で教員に質問・相談する頻度と「専門職としての責務遂行スキル ($r = 0.38 p<0.01$)」だけに有意な弱い関連が示され、そ

の他の他者交流における関連 ($r = 0.10 \sim 0.24 p<0.01$) はほとんど示されなかった(表7)。

さらに対人援助スキル習得における講義及び実習の有用性についてみると、93.3%の学生が実習が役立つと回答し、89.8%の学生が講義が役立つと回答した。また学生が感じている実習及び講義の有用性と対人援助スキルとの相関をみると、ほとんど関連 ($r = 0.20 \sim 0.25 p<0.01$) がみられなかった(表8)。

表4 学年による対人援助スキルの差

項目	相手の立場に立った 関係形成スキル	専門職としての責務遂行 スキル
学年		
1年生	8.28(2.04)	6.98(1.55)
2年生	8.90(1.93)	8.26(1.53)

() は標準偏差

t検定 ** : $P<0.01$ * : $P<0.05$

表5 性別ごとに分類した学年による対人援助スキルの差

項目	相手の立場に立った 関係形成スキル	専門職としての責務遂行 スキル
性別		
男性		
1年生	8.07(1.95)	6.51(1.41)
2年生	8.78(2.20)	8.02(1.55)
女性		
1年生	8.38(2.08)	7.27(1.56)
2年生	9.00(1.82)	8.40(1.51)

() は標準偏差

t検定 ** : $P<0.01$ * : $P<0.05$

表6 社会人経験ごとに分類した学年による対人援助スキルの差

項目 属性		相手の立場に立った 関係形成スキル		専門職としての責務遂行 スキル	
社会人経験	経験無	1年生	8.15(2.17)	**	6.97(1.66)
		2年生	8.97(1.95)		8.21(1.50)
	経験有	1年生	8.54(1.74)	**	7.00(1.36)
		2年生	8.80(1.91)		8.40(1.59)

() は標準偏差

t検定 ** : P<.01 * : P<.05

表7 対人援助スキルと他者交流頻度との相関

	1	2	3	4	5
1 相手の立場に立った関係 形成スキル	—				
2 専門職としての責務遂行 スキル	0.29**	—			
3 教員との相談頻度	0.24**	0.38**	—		
4 親との相談頻度	0.14**	0.18**	0.29**	—	
5 友人との相談頻度	0.10**	0.16**	0.38**	0.45**	—

** : P<.01 * : P<.05

Pearson の相関係数

表8 対人援助スキルと実習及び講義の有用性に関する相関

	1	2	3	4
1 相手の立場に立った関係 形成スキル	—			
2 専門職としての責務遂行 スキル	0.29**	—		
3 実習の有用性	0.20**	0.21**	—	
4 講義の有用性	0.25**	0.22**	0.65**	—

** : P<.01 * : P<.05

Pearson の相関係数

Ⅲ 考察

1) 介護福祉士養成施設における学生の対人援助スキルの特徴

本研究は、学生の対人援助スキルをより正確に捉えるために、現場実践から抽出された西川の対人援助スキルの設問を6項目修正した上で21項目からなる設問を設定した。そして因子分析を用いて、学生における対人援助スキルの構造について分析を行った。その結果、「相手の立場に立った関係形成スキル」及び「専

門職としての責務遂行スキル」の2因子が学生における対人援助スキルとして抽出された。

本研究において示された2つの対人援助スキルは、それぞれが3項目の設問で構成されており、当初設定した21項目の設問のうち15項目が削除されている。つまりこの結果は、修正された21項目の対人援助スキルを測定するための設問が、学生における対人援助スキルを十分に捉えていないことを示している。そして対人援助スキルの性質については、対人援助スキルが経験と共に上昇することが指摘されている⁷⁾⁸⁾。よって既に職業に従事し多くの経験を積んだホームヘル

パーにおける対人援助スキルと、演習や実習などの機会によって部分的に体験を行う学生の対人援助スキルの形態の相違は、本研究において想定したもの以上であったと推察される。

しかし本研究によって得られた学生における対人援助スキルは、相手の立場に立って関係を形成するスキルや専門職としての姿勢・責務を示すスキルからなり、これらは学生が介護福祉士という専門職を目指す上で習得しなければならない基礎的なスキルを示している。よって本研究において得られた対人援助スキルの構造は、学生における対人援助スキルを完全に捉えたものではないが、その一部を測定していると言える。

さらに2つの対人援助スキルを測定するための尺度も信頼性が担保されている（第1因子： $\alpha = 0.72$ 、第2因子： $\alpha = 0.78$ ）ことから、この尺度を学生における対人援助スキルを測定するための尺度として用いても差支えはないと考える。

2) 対人援助スキル習得のための教育効果と課題

本研究は因子分析の結果より、学生における対人援助スキルの一部が「相手の立場に立った関係形成スキル」及び「専門職としての責務遂行スキル」から構成される可能性があることを確認した。そして介護福祉士養成施設における教育効果をみるために、学年間の各スキル得点における平均値差をみた。その結果、「相手の立場に立った関係形成スキル」及び「専門職としての責務遂行スキル」とともに1年生よりも2年生に高い傾向がみられた。そしてこれは、横断的方法によって導き出された結果であることから慎重な解釈を要するが、この結果から介護福祉士養成施設における教育効果によって学生における対人援助スキルが高まったと推察する。

また介護福祉士養成施設における教育効果に対する性別による影響をみた結果、女性においては「相手の立場に立った関係形成スキル」及び「専門職としての責務遂行スキル」とともに向上する可能性が示されたのに対して、男性においては「相手の立場に立った関係形成スキル」に変化がみられなかった。よってこの結果から、性別によって対人援助スキルの習得状況に違いがあることがわかる。また先行研究においても、性別におけるコミュニケーションの相違をみた窪田が、性的役割分業にふさわしい「女性らしさ」や「男らしさ」

が社会的に期待される中で、女性は「思いやり」や「気配り」といった特性を身につけていくことを指摘しており⁹⁾、さらに医学生におけるコミュニケーション差を検討した野呂らによって、男性医学生よりも女性医学生に「共感」の姿勢が頻繁にみられることが報告されている¹⁰⁾。そしてこれらの先行研究の中で指摘される相手に対する思いやりや気配りといったコミュニケーションは、「相手の立場に立った関係形成スキル」にとって重要な意味をもつものである。つまり相手に対する思いやりや気配りといったコミュニケーションは男性に比して、女性が日常的に上手く行っており、男性は女性に比して相手に対する思いやりや気配りが苦手なために、男性における「相手の立場に立った関係形成スキル」に対する十分な教育効果が得られなかったと推察する。

さらに介護福祉士養成施設における教育効果に対する社会人経験による影響をみた結果、社会人経験なし群は「相手の立場に立った関係形成スキル」及び「専門職としての責務遂行スキル」とともに向上する可能性が示されたのに対して、社会人経験あり群においては「相手の立場に立った関係形成スキル」に変化がみられなかった。そしてこの結果は、既にみたように「相手の立場に立った関係形成スキル」の習得が性別による影響を受ける可能性が示されていることから、性別による影響によって示された可能性が考えられる。そこで性別をコントロールし、女性の社会人経験あり群における「相手の立場に立った関係形成スキル」の教育効果をみると、先ほどと同様に変化はみられなかった。よってこのことから、「相手の立場に立った関係形成スキル」の習得は性別による影響だけでなく、社会人経験による影響を受けることがわかる。

また社会人経験あり群において「相手の立場に立った関係形成スキル」に変化がみられなかった理由について検討してみると、このスキルは相手の立場に立って関わろうとする態度を示していることから、入学前の社会経験によって一定程度習得することが可能なスキルとして解釈することができる。そして社会人経験あり群において入学以前の段階で既に一定の蓄積がされていることによって、このスキルにおける教育効果が十分に得られなかったことが推察される。また一方の「専門職としての責務遂行スキル」は、専門職としての姿勢や責任感を示しており入学前の社会経験によ

る蓄積は困難であることから、入学前の蓄積がない中で社会人経験なし群と同様の教育効果が示されたと考える。

次に対人援助スキルと他者交流頻度との関連をみた結果、授業内外で教員に質問・相談する頻度と「専門職としての責務遂行スキル」との間に関連が示された。しかしこの結果は相関分析によって導き出されたものであり、ここから両変数の因果関係を特定することはできない。そこで両変数の関係についてより具体的に検討するために、先行研究について目を向けてみると、他者交流と学習意欲に関する関連をみた中山は教員が学生に関わることによって学生の課題に向う姿勢が促進することを報告しており¹¹⁾、また看護師養成教育における教員と学生との交流について細川は、教員が学生に対して自らの患者や看護に対する考えを伝えることによって、学生は看護という職種の特長性について考え、看護という職種と自己との適否について見つめ直すきっかけとなることを報告している¹²⁾。そしてこれらの報告は、介護福祉士養成教育と異なる領域において報告されたものであるが、教員が学生に関わることによって得られる効果を示しており、これらの効果は本研究に当てはめて解釈することが可能であると思われる。よって本研究において得られた結果は、教員が学生と関わることによって「専門職としての責務遂行スキル」が高まることを示していると推察する。

また本研究において「専門職としての責務遂行スキル」は、教員以外の保護者や友人との交流による関連をほとんど示さなかった。そしてこの相違は、上述の先行研究における報告の中でも示されるように、教育者または専門職として学生と関わる教員の姿勢が保護者や友人のものとは異なることから示されたと考える。

さらに本研究において、対人援助スキル習得における講義及び実習の有用性について約9割の学生が実習及び講義が役立ったと回答していた。そして学生が感じている実習及び講義の有用性と対人援助スキル得点との相関についてみると、この両者の関係はほとんどみられなかった。本研究によって得られたこの結果は、近年、各介護福祉士養成施設において Faculty Development (FD) 活動の一環として授業評価が行われているが、学生における対人援助スキルの習得を図る場合において、養成校の教員は講義や実習に対する学生の主観的な満足感を捉えるだけでなく、学生一

人ひとりにおける対人援助スキルの習得状況を的確に把握する必要があることを示していると言えよう。

結語

本研究は、介護福祉士において習得すべき重要なスキルとして位置づけられながらも、介護福祉士養成教育の中で研究対象としてほとんど着目されてこなかった対人援助スキルに着目し、学生における対人援助スキルの構造を示すとともに、対人援助スキルを習得するにあたっての介護福祉士養成教育における有効性及び課題についてみてきた。

そして本研究において、学生の対人援助スキルの一部が、「相手の立場に立った関係形成スキル」及び「専門職としての責務遂行スキル」で構成される可能性があることを示すことができた。また介護福祉士養成教育における有効性については、その教育効果によって学生における2つの対人援助スキルが高まる可能性があること、教員が学生と関わることによって「専門職としての責務遂行スキル」が高まる可能性があることの2点を示すことができた。養成教育における課題については、男性及び社会人経験のある学生の「相手の立場に立った関係形成スキル」において、十分な教育効果が得られなかった可能性があることを示すことができた。

本研究によって得られた結果から、介護福祉士養成施設がより良質な介護福祉士を輩出するための示唆を行うならば、男性及び社会人経験がある学生に対する「相手の立場に立った関係形成スキル」を向上させるための教育プログラムを検討する必要があることが挙げられる。また学生と教員との交流によって「専門職としての責務遂行スキル」が高まる可能性が示されたが、教員側に話す余裕及び時間がなく、学生との交流がほとんど行われていないことを指摘する報告¹³⁾もある。よって教員が講義内外における学生との日常的な交流に価値を置き、学生が声をかけやすい環境を主体的につくるとともに、教員の側から積極的に関わっていく必要があると言えよう。さらに対人援助スキルの習得は、学生における授業及び実習に関する主観的な有用感とほとんど関連を示さないことから、教員は授業評価の結果だけに満足するのではなく、学生一人

ひとりにおける対人援助スキルの習得状況を的確に把握し、その結果を講義内容及び個別の指導に反映させることが必要である。

最後に、本研究における限界について言及しておきたい。まず一つ目に本論の中で述べたように、本研究において設定した学生の対人援助スキルを測定するための設問は、本来の学生における対人援助スキルを十分に捉えることができていない。よって本研究の中で設定された対人援助スキルの内容について、今後再検討する必要がある。二つ目に本研究において着目した対人援助スキルは、客観的な意味での対人援助スキルの習得状況を測定したものではなく、学生の自己評定によって示されたものであり、調査対象者である学生が自己における対人援助スキルの習得状況を客観的に把握できているとする前提の下に測定されている。今後、他者評定を組み合わせるなどの測定方法の工夫が求められる。三つ目に本研究は、対人援助スキルを習得するにあたっての介護福祉士養成教育の有効性及び課題についてみてきたが、この結果は横断的方法によって得られたものであることから推論の域を出ないことが挙げられる。四つ目に本研究は、2つの対人援助スキルについて学年における平均得点の差をみることで、対人援助スキルの習得状況を把握するに止まっており、対人援助スキル得点の変化をもたらしした要因については捉えられていない。五つ目に本研究は、有意抽出によってサンプル抽出しており、調査サンプルが大阪府下における2年制の短大及び専門学校に限定されていることから、結果の一般化には慎重にならなければならないことが指摘できる。

しかし本研究は、介護福祉士養成教育研究の中でほとんど着目されてこなかった対人援助スキルに着目したことから、一定の意義をもつものと考えられる。今後、これらの限界を踏まえ、より精度を上げた研究を実施するよう努めたい。

〈追記〉

本研究は、日本介護福祉学会第19回全国大会（2011年 東京都）で発表したものを加筆・修正したものである。

- 1) 山口泰弘「わが国におけるケア・ワークの実際と体系化 - 心身障害者コロニーの場合から -」『社会福祉研究』第34号 1984年 pp12 - 17
- 2) 黒川昭登『現代介護福祉論 - ケアワークの専門性 -』誠信書房 1989年
- 3) 奈倉道隆「介護の本質とその実践方法 - 介護関係の確立と自立生活の支援 -」『介護福祉職にいま何が求められているのか』ミネルヴァ書房 1997年 pp10 - 14
- 4) 田中かず子「ケアワークの専門性 - 見えない労働『感情労働』を中心に」『女性労働研究』47号 2005年 pp58 - 71
- 5) 西川真規子「ヘルパーの技能の内実と向上: アンケート調査に基づく実証分析 その1」『経営志林』第41号1号 2004年 pp35 - 53
- 6) 本研究において測定される対人援助スキルは、西川の先行研究と同様に調査対象者の自己評定によって測定していることから、対象者の思いこみを排除できないなど、対人援助スキルの習得状況を測定するにあたっての妥当性に疑問が残る。しかし対人援助スキルは、外部からみえにくいスキルを含むことから客観的な測定が難しい概念である。よって本研究は、自己評定による測定方法の限界を認識した上で、この方法を用いて対人援助スキルの測定を行う。
- 7) 西川真規子「感情労働とその評価」『大原社会問題研究所雑誌』No567 2006年 pp1 - 13
- 8) 鈴木聖子「介護福祉職のコミュニケーションスキルに関する検討 - 自己評価から -」『介護福祉学』8(1) 2001年 pp71 - 78
- 9) 窪田由紀「コミュニケーションとジェンダー」『教育と医学』第3号 2000年 pp58 - 65
- 10) 野呂幾久子 阿部恵子 松島雅人ほか「学生のジェンダー差とコミュニケーション・スタイルの関係 - RIASによるOSCE医療面接のパイロット研究 -」『医学教育』39 2007年 pp13 - 18
- 11) 中山勘次郎「中学生におけるソーシャルサポートと学習統制感との関連」『上越教育大学研究紀要』14(2) 1995年 pp537 - 547
- 12) 細川順子「臨床におけるケアリング教育 - 倫理的で探索的な臨床実習のために -」『神戸大学医学部保健学科紀要』16号 2000年 pp59 - 68
- 13) 松野史恵 安立さつき 柴田貞雄「学生と教員とのコミュニケーションについて」『日本福祉教育専門学校研究紀要』16(1) 2008年 pp67 - 73